日光・中禅寺湖畔における外国人別荘地の形成

A RESEARCH OF THE FOREIGNERS COTTAGES IN LAKE CHUZENJI, NIKKO

伊藤 教子*, 初田 亨**

Noriko ITO and Tohru HATSUDA

Lake Chuzenji in Nikko is one of the famous foreigners resort that became prosperous from Meiji Era in Japan. Several cottages are now on existing, but recently Lakeside area is more famous sight seeing spot than foreigners resort. The foreigner cottage area of Chuzenji lakeside is formed around the minister and the diplomats from opportunity, the 21st year of Meiji, and it grows to be a scale that it is called with the foreigner cottage zone in opportunity, the 30th year of Meiji. An embassy cottage was built, too, and a cottage had the character that moved the foreigner of the minister and the diplomats upper classes to the center except for the individual cottage. "Tokyo Angling and Country Club" of the "Marunuma Fishing Club" rest which aimed at the amusement which was characteristic of the foreigner of Fly-Fishing is made in Showa term since Taisho end. It has a role as a place of the interchange of the diplomats and Japanese upper class people. There was a reason that the most part of the cottage owner of Chuzenji lakeside was a foreigner, too, and fell into the decline with war's beginning.

Keyword : Nikko, Lake Chuzenji, Foreigners Cottages, Tokyo Angling and Country Club, The Minister and The Diplomats

日光, 中禅寺湖, 外国人別荘, 東京アングリング&ントカントリークラブ, 公使と外交官

はじめに

明治維新における神仏分離令以前の中禅寺湖は、中禅寺上人の支配する神域であった。訪問者は男体山を中心とする諸行事の期間中に登山する修験者がほとんどで、信仰を中心とするものであった。また中禅寺湖には、日光町方の者が権利を持って茶屋を営業していた。明治維新後は、それまでの中禅寺の名称は中宮祠と改められ、茶屋の権利を持っていた日光町の人達が、二荒山神社の土地を借りて、茶屋の経営を引き続き行っていた。

明治5年(1872)に男体山の女人禁制が解かれると、山岳修行者だけでなく、日本人観光客のほか、諸外国の外交官が婦人または家族連れで、中禅寺湖や華厳滝などの見学に登山するようになった。幕政時代のような厳格な修行の形態はくずれていき、観光地として発展し始め、食堂や土産店などが出現していった。また中禅寺湖畔一体は、明治17年(1884)に御猟場に、さらに明治20年(1887)には御料地として指定されている。これにより、中禅寺湖畔一体の土地はすべて、宮内省および二荒山神社、輪王寺の所有となった。この頃から、外国人によって別荘も建てられていく。

大正年代に入ると、奥日光方面への旅客収容策が急速に打ち出され、交通機関を充実させて遊覧施設等が完備され、観光地、そして別荘地としてさらに発展を遂げていく。その後、昭和9年(1934)には国立公園の指定を受け、現在に至っている。

中禅寺湖畔の外国人別荘については、『日光市史』¹⁾、『日本別荘史ノート』²⁾、『大日光』³⁾などに断片的に語られているが、その全体像については明らかにされていない。現在は外国人別荘の多く

が失われてしまっているが、中禅寺湖畔の別荘地としての歴史は古く、軽井沢と並ぶ歴史を持っており⁴⁾、日本の別荘地開発を考える上で欠くことの出来ない存在と言える。本稿では、史料およびヒアリングなどを通して、中禅寺湖畔に外国人別荘地が形成された事実と、その発展経緯、およびその内容、特性を明らかにすることで、現在開発が進められつつある中禅寺湖畔の、今後の開発についての参考ともなる資料を作成することを目的としている。

1. 中禅寺湖畔宿泊施設の歴史

山岳修行の人しか足を踏み入れない中禅寺湖畔に、最初の茶屋が出来たのは寛保元年(1741)で、四軒の茶屋が作られ、その後6軒に増えている。明治5年(1872)に男体山の女人禁制が解かれると、明治10年(1877)前後より、登山者のための宿泊施設の必要性が生じ、中禅寺湖畔には、中禅寺社殿付近と菖蒲ヶ浜付近にあった、六軒の茶屋の者達が宿泊に必要な施設をつくり、次第に旅館の形式を整えていった。その後、場所を移転する旅館も現れたが、6軒の茶屋のうち、蕎麦屋と米屋の2軒が今でも営業を続けている⁵⁾。

日光に外国人ホテルが開業したのは明治初期で、明治4年(1871)の鈴木ホテル、明治6年(1873)の金谷カッテージインがある⁶⁾。明治18年(1885)には東京・宇都宮間の鉄道が開通し、さらに明治22年(1889)には、馬返・中禅寺間の山道に九十九折の新道が開拓された。そしてその直後の明治27年(1894)には、中禅寺湖畔に外国人専用のレーキサイドホテルが開業している⁷⁾。

レーキサイドホテルは、創業当初から外国人専用のホテルとして

* ZO 設計室 修士(工学)

** 工学院大学工学部建築学科 教授・工博

ZO Consulting Engineers, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kogakuin University, Dr. Eng.

計画されていた。外国人専用ホテルが早い時期から営業していた箱根では、富士屋旅館が外国人専用、奈良屋旅館が日本人専用と、内々で取り決めがなされていたが⁸⁾、中禅寺湖畔においては、そのような協定はなかった。しかし、レーキサイドホテルが外国人客、他の旅館が日本人客と区分されていた。特に、レーキサイドホテル二代目の坂巻正明の時には、浴衣で建物内を歩き回る日本人客を嫌い、空室があっても日本人客を断るなど、本格的なホテルにこだわりをもって営業していたと言う。また、日光金谷ホテルが自家発電機で発電を行っていたのと同様、レーキサイドホテルでも自家発電所をホテルの裏側に設け発電しており、その余剰電力を中宮祠の人々に売却していたともいう⁹⁾。

ホテルの経営は、坂巻正太郎、正明、栄一氏と3代続いた後、第二次世界大戦後は、一時期イギリス軍に接収され、また昭和40年(1965)に東武鉄道に売却された。明治から大正時代にかけては、外交官や公使、大使などが宿泊客のほとんどを占めており、また、外国人別荘が減り始めた戦後も、宿泊客の9割以上は外国人であったが、東武鉄道に経営が移されたからは、日本人観光客が宿泊客のほとんどになっているという¹⁰⁾。

昭和15年(1940)7月には、国際観光ホテルとして、日光観光ホテルがつくられている。中禅寺湖に国際観光ホテルが建設された理由には、昭和6年(1931)に公布された国立公園法による日光の国立公園指定があったことや、日光が昭和15年(1940)の、オリンピック大会冬季会場候補地のひとつとなっていたことが考えられる。『日光市史』は、栃木県が作成した、冬季オリンピック開催候補に伴う事業計画について、次のように記している¹¹⁾。

昭和十年(一九三五)には日光町、栃木県体育協会が第五回冬季オリンピック候補地としての会場誘致運動をしている。中禅寺湖付近、竜頭・戦場ヶ原一帯、湯元の三ヶ所にスキー施設を開設、昭和十一年(一九三六)には第三回県下スキー大会、第八回明治神宮大会予選・全日本スキー大会を開催するとともに、栃木県が金精峠・白根山中間付近にスキー小屋、菖蒲が浜に観光ホテル建設などの宿泊施設、日光道路改修、舗装、細尾から中宮祠まで道路新設舗装等の具体化計画を出すにいたった。

日光観光ホテルの経営は、金谷ホテル株式会社にまかされ、金谷正生が支配人になった¹²⁾。

2. 明治期の外国人別荘地

明治7年(1874)に、日本政府より外国人遊歩の許可が与えられたことから、日光、中禅寺湖への外国人の訪問者は増加していった。明治初期に中禅寺湖畔を訪れた外国人避暑客は、湖畔の旅荘や輪王寺等の宿坊に宿泊していた。明治18年(1885)には、先に述べたように東京・宇都宮間の鉄道が開通しており、以後、日光を訪れる外国人が急増している(表1)。それに伴い、奥日光、中禅寺湖へ足を伸ばす外国人も増えたと考えられる。

表1 外国人来見者数

年 号	西 暦	来 見 外 国 人 数
明治15	1882	168 人
明治18	1885	553 人
明治20	1887	1199 人
明治22	1889	1351 人
明治23	1890	1741 人
明治24	1891	1928 人

『日光市史』¹³⁾より作成

中禅寺湖畔に外国人別荘を持つようになったのは、明治中頃からで、ベルギー公使夫人エリア・メアリー・ダスタンの明治27年(1894)8月27日の日記に次のように記されている¹⁴⁾。

アルペールと一緒に中禅寺に向けて九時に出発する。申し分のない天気で、急流の緑に沿って人力車で山に登って行く旅は全くすばらしかった。途中の茶屋のほとんどの立ち寄って、短い休みをとりながら三時間半かけて山に登り、一時少し前にカークウッドの日本式の家に着いた。この家は中禅寺で西洋人が建てた最初の家で、湖の岸に建っている。

明治25年(1892)に、政府は土地または家屋を所有する外国人の調査を行っている。その報告書『外国人ニシテ日本人名義ヲ以テ土地又ハ家屋ヲ所有スルモノ調査』には、「外国人所有土地家屋営業便覧一覧表」として、日光地区の家屋の所有者について、英国人アレキサンドル・カークード、伊国人イフ・ビヤシヨ子、米国人リンズレー、米国人エーブル、独国人スクリッパの5人を記載している。5人のうち、中禅寺湖畔の家屋所有者は次の通りである¹⁵⁾。

一、所有者 英国人アレキサンドル・カークード
物件 家屋一棟 建坪四十五坪
目的 住宅
所在地 日光中宮祠二荒山神社
名義人 中宮祠 井上保三郎

このアレキサンドル・カークードとは、トーマス・グラバーと共に、麒麟ビールの前身であるビール会社「ジャパン・ブリュワリー・カンパニー・リミテッド」の設立に貢献した、英国人法律家ウィリアム・M・H・カークードのことである。

この別荘については、明治26年(1893)11月18日付の『下野新聞』に次のような記載がある。

外人が各国の名勝を選び婢妾い僕の名を以て別荘を設け土地を有する等の怪事往々見聞する処なるが県下日光中宮祠にも二ヶ所の家屋を有するものあり、其一は今を去る五六年前の建築にして同地湖水の北岸即ち日光町より登りて湖辺に出る道路と湖水の間にして日本風の高楼なり、地所は二荒山神社境内になるを同地旅店米屋政平の名を以て借請け一か年地料其他米屋の外人より受領する金額二百五十円なりと云ふ而して十月の後には挙げて米屋に寄付するの約ありとも伝へり此所有人は司法省御雇カークード氏なりとす他の一か所は同じく湖辺の字大崎と伝える湯元道に沿える処にして御料地内に属すも米屋政平の名前にして借地し前のカークード氏の周旋にて設けたる英国代理行使某氏の別荘本年の新築に係り二者とも湖水の北岸にして眺望最も佳なる処にあり邦人をして羨望に堪えざらしむる宏壮美麗の建築何れも東京火災保険会社の保険付なり

記事から判断すると、湖畔には2軒の別荘があり、そのうち一軒は明治20年(1887)もしくは、明治21年(1888)の建設、他の一軒は明治26年(1893)に建設されたことがわかる。なおここには、カークードの別荘が「米屋政平」を仲介者としていることが記されており、当時外国人には土地家屋所有が認められていなかったため、日本人を仲介者にして別荘を構えていたらしいことがわかる。

その後、明治26年(1893)から明治32年(1899)における、中禅寺湖畔での避暑生活について、アーネスト・サトウやエリア・メアリー・ダスタンらが日記に細かな記述を残している¹⁶⁾。2人の日記から外国人別荘の数を抽出すると表2のようになる。表に記した別荘は、日記に記載されたもののうち、持ち主のわかる別荘のみで、この他にも外国人別荘は存在していた。

アーネスト・サトウの日記には、彼自身の別荘が記されている¹⁹⁾。

(明治28年8月20日)

四時二十分にそこを發つて、ほとんど徒歩で五時四十分馬返着いた。雨の中を六時十分そこを發ち、八時少し前暗くなってから中禅寺についた。伊藤アサジロウから借りた家お小くあまり快適とは言えない。ラウザーとシュミットとそこで一緒に夕食をする。

このことから、アーネスト・サトウが、明治28年(1895)には日本人の「伊藤アサジロウ」から家屋を借りていたことがわかる。そして、アーネスト・サトウは、翌明治29年(1896)に、後に湖畔で初の大使館別荘(イギリス大使館別荘)となる個人別荘を、御料地内の砥沢に新築している。この別荘について、アーネスト・サトウおよびダヌタン夫人の日記には、完成までの経過が次のように記されている²⁰⁾。

(明治28年9月17日：サトウの日記より)

朝、グートシュミットのボートに乗って、私が新しく家を建てている砥沢まで十二分かかって漕ぐ。

(明治28年10月20日：ダヌタン夫人の日記より)

水身の澄んだ静かな水に、紅葉の華やかな色が映えている景色は言葉に表せないほどの美しさであった。私たちは湖を真直ぐに漕ぎ渡り、サー・アーネスト・サトウの新しい家の場所まで行った。そこで現職人たちが忙しそうに働いていた。

(明治29年5月30日：サトウの日記より)

コンダーと家の敷地へ行って、ボート・ハウスの位置を決め、家の裏手から丘の方へのびている小道を歩く。敷地の前は、広げられるように三段のテラスを作ることとする。

(明治29年7月15日：サトウの日記より)

表2 明治29年・30年の外国人別荘

明治29年(1896年)		
	所有者	肩書き
1	アーネスト・サトウ別荘 ^{*1,2}	英国公使
2	アルマン別荘 ^{*1}	
3	ヴェーデンブルック別荘 ^{*1}	オーストリア公使
4	オゴーマン別荘 ^{*1}	
5	カークード別荘 ^{*2}	司法省法律顧問
6	カロ別荘 ^{*1}	スペイン書記官
7	グートシュミット別荘 ^{*1}	在日ドイツ公使
8	シャバイヤー別荘 ^{*1}	在日ロシア公使
9	ダヌタン別荘 ^{*1,2}	在日ベルギー公使
10	トーマス・グラバー別荘 ^{*1}	
11	イザベラ・ビショップ別荘 ^{*2}	旧姓イザベラ・パード、英国人
12	ブルータルズ別荘 ^{*1}	フランス公使館一等書記官
13	ラウザー別荘 ^{*1}	英国公使館一等書記官
14	レーンホルム別荘 ^{*1}	帝国大学ドイツ語教師
明治30年(1896年)		
	所有者	肩書き
1	アーネスト・サトウ別荘 ^{*1,2}	英国公使
2	オゴーマン別荘 ^{*1}	
3	カークード別荘 ^{*1}	司法省法律顧問
4	ダフィン別荘 ^{*1}	
5	ダヌタン別荘 ^{*1,2}	在日ベルギー公使
6	デュ・ドレズネ別荘 ^{*1}	フランス公使館二等書記官
7	トーマス・グラバー別荘 ^{*1}	
8	イザベラ・ビショップ別荘 ^{*2}	旧姓イザベラ・パード、英国人
9	ブルータルズ別荘 ^{*1}	フランス公使館一等書記官
10	ヘロッド別荘 ^{*1}	アメリカ公使館書記官
11	ボンディー別荘 ^{*1}	
12	メイ別荘 ^{*1}	ベルギー公使館二等書記官
13	リスボア別荘 ^{*1}	ブラジル特命全權公使

*1：『アーネスト・サトウ公使日記I、II』より¹⁹⁾

*2：『ベルギー公使夫人の明治日記』より²⁰⁾

家への道すがらダヌタン男爵夫人を訪ねる。雨が強く降っていたので、ラウザーと昼食するのを諦めて、真直ぐ家へ行った。家の中はひどく散らかっている。しかし、夕食までには綺麗に片付いた。居間、食堂、二階の二部屋に障子がはまり、階段もできて建具の残りも届いた。

日記にある「コンダー」とは、建築家ジョサイヤ・コンドルのことで、アーネスト・サトウの別荘をコンドルが設計した可能性も考えられる。また、その他の別荘所有者もほとんどが公使、書記官などで、他にも建築家によって別荘の設計が行われていた可能性も考えられる。

外国人別荘には、アレキサンドル・カークードやアーネスト・サトウの別荘のように、個人別荘として新築されたもののほか、借主が固定されず毎年のように変わる別荘も存在していた。その様子について、アーネスト・サトウの日記には、次のように記されている²¹⁾。

(明治31年7月18日)

かなり暑い日だ。三時で七十一度(摂氏二十二度)ある。われわれ四人でボートを漕ぎ、家の北西の方向にある岬まで行って、そこから元パールタレスの家だったボンディーの家まで行く。

(明治31年7月19日)

限僅の花が咲いていた。そこかしこで去年の茎から小枝が伸びており、多いのは三本も出ていた。帰りは湖の北岸沿いに漕ぎ、ド・ボンディーの元の家のところまで来て、そこから湖を横切って家へ戻る。

(明治32年5月27日)

午後、大平から華蔵の滝の川床まで通じる道の方へ出たが、ずっと下までは降りなかった。そのあとライデンの家へ行った。そこは去年までデュ・ドレズネが借りていた家だ。ホテルの別荘とヘロッドの家とオゴーマン夫人の家が間もなく完成する。

中禅寺湖畔に建設された外国人別荘の位置をみると、最初に建設された2軒の別荘は大崎の地で、日光市内より九十九折りの新道を登り、二荒山神社付近の中宮祠の中心街を抜けた、湖の北岸に位置していた。公使の日記からは、北岸に位置していた別荘として、前述の2軒以外にダヌタン夫人別荘、メイ別荘、オゴーマン別荘、ド・ボンディー別荘の4軒の外国人別荘が確認できる²²⁾。またアーネスト・サトウの日記には、明治33年(1900)に湖北岸に「外国人別荘地帯」が形成されていたことが記されている²³⁾。

(明治31年6月19日)

九時頃、二人の男と一緒にボートを出し、村の先の外国人別荘地帯まで漕ぐ。それから帆を上げて葛葉の浜までゆっくり帆走した。

この記述から判断すれば、最初の別荘が中禅寺湖畔に建ってから10年程度のうちに、湖畔に「外国人別荘地帯」が形成されていたことがわかり、中禅寺湖畔が、明治時代後期にはすでに別荘地と

図1 明治後期中禅寺湖畔外国人別荘配置図

て繁栄していたらしいことがわかる。

明治期の外国人の別荘地帯は、南面に湖を望む湖北岸、二荒山神社付近の多崎を中心に発展し、その後別荘は、アーネスト・サトウの別荘が新築された、湖の東岸である砥沢へと増加して行ったといえる（図1）。また「外国人別荘地帯」の内容については詳細が不明だが、一つの地域にある程度以上の別荘がたまって存在していたらしいと考えることは可能であろう。

3. 大正期の外国人別荘地

東京・日光間、及び中禅寺湖までの明治以降の交通の発展をまとめたものが表3である。これからわかるように、大正時代には、中禅寺湖への交通の便が急速に発達している。大正6年（1917）には、日光・馬返間に日光自動車株式会社の乗合自動車が開業し、大正14年（1925）には、馬返・中禅寺湖間が開通し、乗合自動車で中禅寺湖まで行くことができたようになった。

また、中禅寺湖における郵便業務や電信業務については、明治期から整備されている（表4）。アーネスト・サトウの日記には、これらの整備状況について次のように記されており、外国人公使らの働きかけがあり、整備が早期に進んだことも考えられる²⁴⁾。

（明治29年3月3日）

近くモスクワに向けて出発される伏見宮殿下のために開かれた公式の送別晩餐会に出席する。隣の席は土方だったが、もう片方の席は山県の出席を予定して空けてあった。白根が中禅寺への電信線は、我々が夏にそこへ行くまでには必ず開通すると言った。横浜の領事館の電話も四月には開通するそうだ。

（明治30年12月9日）

私が三宮宛に手紙で中禅寺の私の家の前の道路のことを書いたので、その件で長崎省吾（式部官）が訪ねてきた。その機会に、西男爵、小村、都筑は、私の訪問に対して答礼がないと言っておいた。

郵便や電信の業務が比較的早い時期に整備された理由には、中禅寺湖畔が、外交官らの別荘地として早くから発展しており、その為に、これらの必要性が生じたことが考えられる。郵便や電信の整

表3 中禅寺湖路歴年表（交通関係）

年号	西暦	
明治17年	1884	日光一門宮内省御氣場に指定
明治18年	1885	東京～宇都宮間に鉄道開通
明治21年	1888	小倉山・野州原及び奥日光が宮内省御料地となる
明治22年	1889	馬返～中禅寺間の山道に九十九折りの新道を開拓
明治23年	1890	宇都宮～日光間の鉄道全面開通
大正2年	1913	日光駅～馬返間に日光電気軌道が全面開通
大正6年	1917	日光自動車（株）は日光～馬返間に乗合自動車開業
大正14年	1925	馬返～中禅寺間の軌道が拡張され乗合自動車運行
昭和4年	1929	東武鉄道日光線の浅草～日光間が全線開通
昭和7年	1932	馬返～明智平間に日光登山鉄道が開業
昭和8年	1933	明智平～中禅寺湖間に自動車専用道路開通

『奥見史抄』²⁵⁾より作成

表4 中禅寺湖路歴年表（通信関係）

年号	西暦	
明治20年	1887	切手売下所設置
明治29年	1896	電信事務開始
明治31年	1898	郵便受取窓口引取事務開始
明治35年	1902	電話通話事務開始、県内初の官設公衆電話設置
明治36年	1903	電話交換事務開始
大正5年	1916	菖蒲ヶ浜電力株式会社発電所設置

『奥見史抄』²⁶⁾より作成

備は、夏季に長期滞在する外交官などを含む外国人にとって、有効な役割を果たしたことであろう。

大正時代前半に、中禅寺湖畔に別荘がいくつかあったかを示す史料はなく、別荘の状況を確認することは困難であるが、大正末期に作成された「中禅寺湖畔別荘見取り図」（図2）には、外国人別荘が39軒、日本人別荘数が3軒の、合計42軒の別荘が記されている²⁷⁾。このことから、明治末期から大正初期にかけても、着実に外国人別荘が増加していったことがわかる。また、数少ないが日本人の別荘も確認できる。日本人の別荘には、岸本別荘、徳尾別荘、大塚別荘の3軒がある。

「中禅寺湖畔別荘見取り図」によれば、外国人別荘の位置は、明治期には、湖尻を中心に建てられていたが、大正末期にはさらにその範囲が広がり、菖蒲ヶ浜の方まで建設されていたことも確認できる。

大正末期から昭和初期には、大正11年（1922）に建設されたフランス大使館別荘のほか、いくつかの大使館の別荘も建設されている。外

図2 中禅寺湖畔別荘見取り図

国人の個人別荘に留まらず、大使館の別荘が建設されたことは、中禅寺湖畔の別荘地の性格を考えるうえでも注目される。

4. 東京アングリング・エンド・カンツリー・倶楽部と昭和期の外国人別荘地

大正元年(1912)には、後に中禅寺湖畔の外国人別荘地における活動の中心的拠点ともなる、「東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部」の前身である「丸沼釣釣会」が結成されている²⁹⁾。丸沼釣釣会は、大正13年頃(1924)に代表を侯爵・鍋島直映、理事を神戸のハンター財閥のハンス・ハンター³⁰⁾として、「東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部」(以下、T. A. C. とのみ記す)に発展している。

T. A. C. クラブ会員の中心は、東京に家や職場を持つ財界人や皇族達であった(表5)。クラブの事務局は、ハンス・ハンターの会社があった東京市赤坂に置かれていた。このことから、土地賃貸や建築計画などが、東京で行われていた可能性も考えられる³⁰⁾。クラブの名称に「日光」ではなく「東京」が使われたのも、おそらくそのことに由来するのであろう。

T. A. C. のクラブ会則には、次のような内容が記されている。

本倶楽部は野外運動を奨励するため、鱒釣ゴルフ場等を設置し、なかんずく鱒釣りを紳士的に行うことを主たるものとする。

表5 T. A. C. クラブ会員

後援	秩父宮、朝香宮、東久邇宮
会長	侯爵鍋島直英
副会長	男爵岩崎小彌太、伯爵樺山愛輔
運営委員長	ハンス・ハンター
名誉幹事	ハンス・ハンター
名誉会計	子爵松元春朝
名誉会員	侯爵久邇邦久、ドイツ大使Dr.ゾルフ、英国大使ジョン・テイレイ、ベルギー大使ド・パッソンビエール、男爵林権助、松平国雄
普通会員	浅野良三、藤山愛一郎、男爵古河虎之助、林民雄、子爵井上勝純、加賀正太郎、加藤武男、岸本吉三衛門、串田萬蔵、男爵森村一左衛門、男爵西竹一、男爵大倉喜七郎、大谷尊由、伯爵西井忠克、香港上海銀行D・M・ロス、H・S・ワイゴール、他全四十四名
特別会員	D・アブリコソウ、Dr.ブロックホイス、法學博士土方孝、英国武官D・ヒル、B・ヤニカン、子爵松平慶民、A・W・メドレイ、子爵田中阿彌麿

『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係書類』³¹⁾より

会則によれば、T. A. C. がアングリング(フライフィッシング)を主たる目的としていたことがわかる。またほかに、ゴルフ場、運動場、及び会員の為の別荘を建設する計画などもたてている³²⁾。T. A. C. は、東京の財界人、皇族、外国人の中禅寺湖畔を核とした交流のクラブと考えてよいだろう。

昭和に入ると、大正末期に作成されたT. A. C. の計画が実現に移されていく。また、昭和3年(1928)には、イタリアおよびベルギー大使館別荘も建設されている³³⁾。

T. A. C. による施設の建設は、大正14年(1925)に帝室林野局から借受けた西ノ湖畔に、養魚場のための見張り小屋、及び養魚池を設けることから始められた³⁴⁾。そして大正15年(1926)には、クラブ会員の娯楽場となるクラブの本建案を中禅寺湖畔の西端である千手ヶ浜に建設するため、輪王寺宛に借地願いを提出している。そこには、借地目的が次のように記されている³⁵⁾。

倶楽部の運営上ぜひともその境内の一部を借用したい。ついでに、貴顕紳士や外国使臣をはじめとする衆人の遊覧娯楽を提供して、外交上の一助とする希望をもって設立した倶楽部なので、どうかご理解を願いたい。

これによれば、クラブ建物の建設目的が、貴顕紳士や外国使臣の交流の場として、有効な役務を果たすことが考えられていたことがわかる。またこのことは、日光・中禅寺湖の外国人別荘地のもつ意味が、軽井沢の別荘地とも性格を異にしていたらしいことをうかがわせる。この建物は、実際に建てられることなく計画だけで終わってしまったが、アントニン・レーモンドによって、大正15年(1926)に設計された「日光中禅寺アングリングクラブ」の図面(図3)が残されている³⁶⁾。

実際のT. A. C. 会員たちの娯楽場としての建物は、ハンス・ハンターの別荘のあった大崎の地に、西六番別荘として昭和2年(1927)に建設された。

娯楽場の建設場所が、千手ヶ浜から大崎になぜ変更されたかは定かでないが、当時、湖尻から千手ヶ浜への交通手段はボートしかなく、また外国人別荘との距離も遠く離れており、これらの理由から、クラブの娯楽場建設の敷地が、より便利な地である大崎へ変更されたものと思われる。

西六番別荘の建物については、アントニン・レーモンドの設計になる「西六番改築工事」の図面(図4)が残されている。西六番別荘は、事実上はT. A. C. のクラブハウスとして使用されていたが、この建物について、クラブの記録には何も記述されていない。また西六番別荘には、先の「日光中禅寺アングリングクラブ」の計画案には存在しな

図3 「日光中禅寺アングリングクラブ」図面(レーモンド設計事務所所蔵)

かった、クラブ理事であるハンス・ハンター専用の和室が2階に設けられている。このことや、この場所がハンス・ハンターの別荘であった地であることを考えると、この施設は、ハンス・ハンター自身が、クラブのために個人所有の土地を提供し、さらに建物を建設したものとも考えられる。

一方、千手ヶ浜の敷地には、片品村から移築された休憩所が、千手クラブハウスとして昭和2年(1927)に建てられている³⁰⁾。その後、クラブハウス西六番別荘の西隣にも、ハンス・ハンターの所有地として、会員家族のための別荘として西二番別荘が昭和6年(1931)に、西一番別荘として昭和8年(1933)に建設されている。西六番別荘は女人禁制であったが、西一番、西二番別荘には、クラブ会員の女性家族も宿泊できるようになっていた。西一番、西二番と西六番の別荘は、一階にリビングやダイニングと、二階にベッドルームを持っており、クラブ会員のための休憩所や宿泊施設としての役目を果たしていた。

以上のように、会員のための別荘は着実に建設されたが、当初の計画にあったゴルフ場、及び運動場などは、その後も実現されることがなかった。

T. A. C. は順調にクラブ経営を進めていたが、昭和15年(1940)に、T. A. C. の中心的存在であり、各国外国人の社交の場となっていた西六番別荘を焼失している。その後、同年にハンス・ハンターは、千手ヶ浜の輪王寺借地内に、ハンス・ハンター別荘を建設している。ちなみにこの別荘は、中禅寺湖畔の外国人別荘として、最後の建物になった。しかしやがて、戦争が始まり、外国人のクラブ会員が強制退去させられるようになると、華やかな空気が段々となくなり、T. A. C. も昭和19年(1944)に解散している³⁰⁾。

5. まとめ

明治中期から昭和戦前にかけての中禅寺湖畔における外国人別

図4 「西六番改築工事」図面(レーモンド設計事務所所蔵)

荘について、その避暑地としての形成や発展経緯について検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

1. 中禅寺湖畔の外国人別荘地は、明治20年頃(1887)より公使、外交官らを中心に形成されていき、明治30年頃(1897)には外国人別荘地帯と呼ばれる程の規模に成長している。
2. 大正期には日光・中禅寺湖間の乗合自動車交通も確保されるなど、交通が便利になり、外国人別荘地としてさらに発展していった。
3. 中禅寺湖畔の外国人別荘地は、個人別荘のほか、大使館別荘も建設されており、公使、外交官ら、上流階級の外国人を中心とした別荘地の性格をもっていた。
4. 大正元年(1912)には、フライフィッシングという外国人特有の娯楽を目的とした「丸沼鱒釣会」が設立され、大正13年(1924)には、「東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部」へと発展しているなど、中禅寺湖畔の別荘地帯が、日本人貴顕紳士や外国使臣の交流の場として大きな役割を果たしていた。
5. 中禅寺湖畔の別荘所有者の大部分が外国人であったという理由もあり、第二次世界大戦が始まると共に、別荘地として衰退の一途をたどっていった。

本論文をまとめるにあたっては、レーモンド設計事務所 的埜教介氏から図面の提供をいただいた。また、「東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部」史料の閲覧では、日光市立図書館のご協力を頂いた。なかでも、日光市役所の福田和美氏には多くのことを教えて頂いた。お世話になった方々に深く感謝いたします。ほかにも、ヒアリングなどで多くの方々にお世話になった。

[注]

- 1) 日光市役所編『日光市史』日光市役所 昭和54年。ここでは、日光および奥日光の歴史がまとめられている。奥日光に関しては、交通や郵便局等の設置、土地所有区分が中心であるが、外国人の見た日光として、外国人の記述を記している。
- 2) 安島博幸・十代田朗『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局 平成3年。ここでは、日本の高原別荘地のひとつとして日光・中禅寺湖を取り上げ、外国人別荘地としての中禅寺湖をまとめている。
- 3) 福田和美『大日光第65〜67』日光東照宮 平成3年。ここでは、避暑地日光成立史として、日光・中禅寺湖畔の外国人避暑地としての成立をまとめている。
- 4) 明治18年(1885)のカナダ生まれのイギリス教会牧師A・C・ショウとJ・M・ディクソンが軽井沢を訪れたことによる。翌年から彼らは毎夏を軽井沢で過ごすようになり、明治20年(1887)にショウ牧師が廃業した旅館を買収し大塚山に移築することによって別荘を建てた。初期は外国人避暑地として発展し、避暑地という概念が定着した軽井沢であったが、日本人による大きな別荘地開発が盛んに行われた結果、昭和になるとその別荘数も急激に増加し、昭和62年(1962)には1万戸を超えている。
矢野實『軽井沢別荘史』住まいの図書館出版局 昭和62年。
前出『日本別荘史ノート』P88〜95
- 5) 明治期までは湖畔に6軒の旅館がひしめいて営業していたものの、大正3年(1914)の大火によりすべての旅館が全焼したことをきっかけに、場所を移転する旅館も現れた(米屋徳富へのヒアリングによる)。
- 6) 鈴木ホテル：「栃木県鉢石町の鈴木喜惣次経営の鈴木ホテル、明治四、五年より十五、十六年頃迄人力車、馬車の立場を兼ね外人を宿泊さす」運輸省鉄道総局観光課『日本ホテル略史』運輸省観光部 P8 昭和46年。
金谷カッケージイン：「明治六年六月東照宮の楽人金谷善一郎米人ドクトル・ヘツボンの指導により夏期中田母澤御用邸近くの四軒門にありし

- 自宅と隣の家屋を借り集め避暑地カツテイジ・インを開業す。」前出『日本ホテル略史』P10
- 7) 明治二十七年四月日光中禪寺湖畔レーキサイドホテル開業す。」前出『日本ホテル略史』P44
- 8) 『富士屋ホテル八十年史』富士屋ホテル株式会社 P44 昭和33年
- 9) 日光金谷ホテルは明治41年頃に自家発電所を設置している。(金谷眞一『ホテルと共に七拾五年』金谷ホテル株式会社 P29~31 昭和29年。)レーキサイドホテルについてホテル3代目坂巻栄一氏夫人、坂巻初子氏談、初子氏は昭和20年に坂巻栄一氏と結婚し、ホテルのフロントなどを勤めていた。
- 10) 前出 坂巻初子氏談
- 11) 前出『日光市史』下巻 P691~692
昭和5年(1930年)に国際観光局が運輸省に設置され、外客誘致事業は、「国際観光政策」の1つとなった。これを受けて日本各地でリゾートホテル建設が盛んになり、現在へと続くリゾート、観光地である上高地、蒲郡、川奈、唐津、赤倉等は国際観光局が斡旋した大倉資金を用いた「国際観光ホテル」として、新たにホテル建設が進んだ。これらのホテルは、最初から外客誘致を目的として建設された施設であるが、雲仙や阿蘇、河口湖、松島、そして中禪寺湖などの既成観光地、リゾート地でも新たな外客向け施設の必要性から、この国際観光ホテルが建設された。
- 12) 前出『ホテルと共に七拾五年』P62~63
- 13) 前出『大日光66』P76
- 14) エリアノラ・メアリー・ダスタン著 長岡洋三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』中央公論社 P64 平成4年
- 15) 外務省外交資料館所蔵資料『外国人ニシテ日本人名義ヲ以テ土地又ハ家屋ヲ所有スルモノノ調査』、『外国人所有土地家屋営業関係一覧表』
- 16) 前出『ベルギー公使夫人の明治日記』
アーネスト・サトウ著 長岡洋三訳『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』新人物往来社 平成元年
アーネスト・サトウ著 長岡洋三、福永郁雄訳『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』新人物往来社 平成3年
- 17) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』P42
- 18) 前出『ベルギー公使夫人の明治日記』P97
前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』P150、165
- 19) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』P159、166、169、173
前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』P106、135、137、
- 20) 前出『ベルギー公使夫人の明治日記』P66、119、
- 21) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』P137、252
- 22) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』P135~137
- 23) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』P118
- 24) 前出『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』P113、301
- 25) 奥日光経友会『奥見史抄』奥日光経友会 平成2年
- 26) 前出『奥見史抄』
- 27) 大島久治作成「中禪寺湖畔別荘見取図」大島久夫氏蔵
- 28) 『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』日光市立図書館蔵、「丸沼鵜釣會々員名簿」による会員には、今村繁三、子爵石川成秀、男爵岩崎小彌太、子爵加藤高明、伯爵樺山愛輔、子爵田中阿歌麿、田中清次郎、中村是公、侯爵鍋島直映、子爵鍋島直純、鍋島桂次郎、赤星鉄馬、西園寺八郎、男爵古川虎之助、伯爵酒井忠克、佐藤愛鷹、土方寧、土方久徴、ハンス・ハンターの名が記されている。
- 29) ハンス・ハンター：父はエドワード・ハズレット・ハンター（慶応元年：1864年来日。造船所勤務の後、E・H・ハンター商会を設立。その後明治12年：1881年に大阪鉄工所〔現日立造船〕を設立。神戸の自邸は、旧ハンター氏邸として移築され国の重要文化財に指定されている）。明治15年（1884）にE・H・ハンター次男として生まれる。19歳にしてロンドンの鉱山学校で冶金学を修め、日本に帰国後家業を手伝う傍らいくつかの鉱山経営を営む。
- 30) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内大正14年1月20日付「借地願承諾書」には倶楽部の所在地として東京市赤坂区榎坂町老番地が記載されている。
- 31) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内大正15年3月13日付「大島久治発倉場富三郎宛の手紙」に記された倶楽部会員名。
- 32) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内大正14年7月15日付「借地願書」には、倶楽部運動場及養魚場計画書として、1.20万坪にゴルフ場を設置し、周囲に射撃場、弓術場、野球場、を逐次併置する。2.西ノ湖、外山澤川を養魚場とし会員の釣り場とする。3.倶楽部を建設し会員の宿泊施設と室内娯楽場とする。4.会員の別邸を建設するため、道路と飲料水の設備を完備させる。の4つが記されている。
- 33) イタリア大使館別荘：昭和3年建設、設計者アントニン・レーモンド
ベルギー大使館別荘：昭和3年建設、設計者不明
- 34) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内大正14年6月17日付「借地願 見張番小屋・養魚池」には、帝室林野局東京支局長帝室林野局技師 佐々木和策宛に、見張番小屋平屋建坪19坪、物置6坪、及び養魚池3面を大正14年6月より大正18年12月までの5ヶ年間借りるための借地願が記されている。
- 35) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内大正15年2月21日付「賃貸借契約書」の中で千手ヶ浜の土地に対して輪王寺門跡 今井徳順宛にて賃貸借契約を結んでいる。その借地目的としては、「1.倶楽部並ニ之ニ附随スル建物及會員住宅設置。2.建造物ハ凡テ風致ニ支障ナキ構造タルベキモノトス。3.他教徒ノ布教傳道用ニ供セザルコト」と記されている。
- 36) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内昭和2年9月17日付「受領証」には倶楽部会員の今村繁三所有の片品村にある木造板葺平屋建て一棟が倶楽部に寄贈されている。この建物が千手ヶ浜に倶楽部の休憩所として移築されたと考えられる。
- 37) 前出『東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部関係資料綴り』内昭和19年4月30日付「借地返還願」には、「陳者当クラブ名義ニテ拝借中ノ奥日光御料地ノ儀今般当クラブ閉鎖仕候ニ付返地申上度茲許同封借地返還願式通提出仕候間何卒御受理成下度此段貴意申候也」と記されており、倶楽部閉鎖に伴い借地返還願を提出したことがわかる。

(2002年4月10日原稿受理、2002年5月29日採用決定)